



# アーカイブ 通信 No.12

No.12

2018.3.1

- ◆編集・発行：  
ネットワーク・市民アーカイブ
- ◆tel: 042-540-1663 (事務局)  
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)  
E-mail: simin-siryu@nifty.com  
www.c-archive.jp
- 〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)
- ◆正会員 1口 6000円、賛助会員 1口 3000円 / 年  
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226  
口座名：市民アーカイブ

特別寄稿

## 市民活動資料が 放つ光

「1968年—無数の問いの  
噴出の時代」を見学して

新井勝紘

開催期間も終盤だった昨年12月、かつて私が所属した国立歴史民俗博物館の企画展示「1968年—無数の問いの噴出の時代」展を見学した。60年代から70年代にかけて高揚した社会運動に焦点をあて、その「最も尖った山場にあたる〈1968年〉」という年をもって象徴的に表現した」と開催挨拶にあるように、ベトナム戦争反対運動、住民運動、水俣病に関する運動、三里塚における空港反対運動、さらに全国の大学を席卷した大学闘争などに光をあてた、ナショナル・ミュージアムとしては実に思い切った展示だった。

こうした現代の社会運動をテーマとした展示実現が、今日では、全国の国立博物館や資料館ではなかなか困難になっている。たとえ芸芸員が企画立案しても、実現ま

でははかなり高いハードルを越えなければならぬ現状があることを考えると、独立法人となつてはいるが、国立歴史民俗博物館のこのチャレンジは、大きな意味をもつたと思う。

### ◆伝わってくる強い意志

実際の展示では、何をどう展示していたのだろうか。こうした社会運動の実相を伝えるために使われた資料は、1人でも多くの人に運動を広め、理解してもらうために作成された様々な紙資料だった。あげてみると次のような資料が含まれていた。

ポスター、チラシ、リーフレット、呼びかけ文、パンフレット、ノート、メモ、日記、ニュース、ミニコミ、機関誌、要請文、抗議文、声明文、集会チケット、新聞、雑誌、写真、同人誌、サークル誌、月報、招待状、遺書、吊辞、署名用紙、議事録、電報文、書簡等。

紙以外の資料には、はちまき、旗幟、腕章、ヘルメット、ドラム缶、落書き、壁紙などが展示されていた。

紙資料については、金銭的な問題から当然、印刷も自分たちで行っていたものが多く、1枚1枚人力で刷り上げる謄写版(ガリ版)印刷が大半

開館4周年記念集会

5月27日(日)午後2時30分〜 たましんRISURUホール

## 「五日市憲法の発見と その現代的意義

〜半世紀前の明治100年キャンペーンに抗して〜

講師・新井勝紘さん



市民活動資料センター「市民アーカイブ多摩」とその運営団体である当会は、この4月で5年目に入ります。

私たちは市民活動資料を50年、100年先に残すことを目標としています。50年先から今の時代をふりかえる時の手がかりの1つとして、私たちが保存している資料があります。

では、50年前に遡った時代はどんな時代だったのか、そしてその時代に発見された100年前の五日市憲法は何をその時代にもたらしたのでしょうか。五日市憲法の発見者の1人である新井勝紘さんにお話を伺いながら、これからのアーカイブの役割を考えます。

当日は1時15分〜2時15分まで定期総会も開催します。

であった。運動体の現場に充満する熱い思いが、わら半紙一枚に込められている。鉄筆で書く文字の形にこだわりに、何度も書き直したりした。その意味で、印刷された文字には書き手の個性や思いが、そのまま反映しているのである。コピーなども無い時代、自分たちの思いを伝えるには、この方法が1番であった。謄写版セットに原紙とインクがあれば、どこでもいつでも印刷できた。

# 受け継いでいく思い

—ハンセン病文庫から  
こくりつ  
国立の資料館へ—

講師：黒尾和久さん(国立ハンセン病資料館)

2018.1.8 於：一橋大学



## ◆不思議なパワーを持つ資料

このガリ版刷りの原資料と紙資料群は、その後どのように保存されてきたか。運動が一段落し、組織の解散や関係者の離脱などで、ほとんどの資料の行き場がなくなる。関係者が個人的に保存する以外に、まわって残るケースは少ない。個人保存も限界がある。関係者が亡くなれば、よほど家族や

周囲の理解がない限り、一代限りの資料として消滅、焼却、廃棄される運命になる。

市民アーカイブ多摩が収集・保存、公開する「市民活動資料」は、まさにこの企画展での主な展示品と同一である。関心を寄せなければ、自然と消滅してしまう運命の資料であるが、今回の歴博の「1968年」という時代を象徴する資料として展示表現されると、他の

資料では追従できない強烈な光を放つて、我々見る者を圧倒する。そのくらいの歴史力をもって迫ってくる資料であった。展示ケース一杯に並べられた資料群は、色あせたり、破けたりしたものもあったが、ベ平連、砂川、水俣、三里塚、あるいは日大や東大の学生運動の現場に、わが身を引き寄せられるような不思議なパワーが出ていた。

## ◆収集・保存・公開の先へ

「市民活動資料」とは、こんな力を持ち合わせていることを、改めて認識し、収集と保存から、さらに一歩前に表出させる公開、それも展示という場を持つ意味を再認識した。ただ、歴博の展示も満点とは言えず、展示手法に新鮮さが足りないような気がした。ガリ版刷りの資料をどう活かして展示

するか、まだまだ検討する余地がある。その意味で言えば、市民資料の活用も、「人々の意見、思いの交流」と、人権尊重と生きやす社会の実現に向けて、収集・保存・公開の3点セットにプラスする何かを考えていく必要があるのではないか。黙視していれば自然消滅してしまう資料を少しでも救い出すために。

ハンセン病の患者さんたちが自分たちで資料収集し記録を残していることと作った小さな「ハンセン病文庫」は、募金を募って作った「高松宮記念ハンセン病資料館」等を経て、2007年に国立の資料館となりました。ハンセン病患者を隔離してきた国が、どのように自身で思いを継いでいけるのか、時代を超え、当事者から非当事者へと記録を保存していく意味を考えました。司会は町村敬志(当会代表)。

## □2つの目的を伝えるために

東村山市青葉町に所在する国立ハンセン病資料館は、2001年のらい予防法国家賠償請求訴訟の原告勝利をうけて、国によるハンセン病元患者・回復者の名誉回復を行う啓発施設として、07年にリニューアル開館しています。前身は、国立ハンセン病療養所多磨全生園の入所者の努力と多くの人々の協

力により1993年に開館した高松宮記念ハンセン病資料館でした。資料館の開館は、①ハンセン病回復者が生きてきた証しを残し伝える、②国によるハンセン病政策や世間・社会に根強く残る回復者への差別・偏見は誤りであり、それを伝える、という2つの設置目的があり、その達成のために博物館という方法が採られたのです。

要するに、国の隔離政策によって療養所に隔離されてきた方々の努力により成立した資料館といえるのです。そうした資料館活動の意義を国賠訴訟に敗訴した国が、被害者の名誉回復事業の啓発拠点として、財政的に支援することを決定したので、国内に数多くある国立博物館にあつて、その設立の経緯はきわめてユニークで有意義なものがあると思います。資料館には、③国によるハンセン病回復者の名誉回復の実践の場にする、という目的が加わることになりました。

## □文庫の資料収集・整理から

高松宮ハンセン病資料館の開館には、全国のハンセン病療養所を巡り資料収集・寄贈を受け、展示シナリオを書いた佐川修さんや大竹章さんの尽力、平沢保治さんの各方面との粘り強い交渉などが伝わっています。また多磨全生園入所者を中心に多くのハンセン病回復者が多額の設立資金を提供しています。

そして忘れてはならないのは、高松宮ハンセン病資料館の活動の源流が、69年に多磨全生園図書館内に設置されたハンセン病文庫、その活動を引き継ぎ77年に開設されたハンセン病図書館(08年閉鎖)での活動でし

た。その図書館での文化活動の中心を担ったのが、故山下道輔さんでした。山下さんは、ハンセン病に関する資料をとにかく収集、整理して、それを公開しようという作業をただひたすら継続してきた方でした。図書館活動から始まった文化活動です。当初は図書、文書など紙媒体の資料が収集対象の中心でしたが、間もなく収集資料には入所者の生活資料など、すなわちへもの資料も加わり、90年には、ハンセン病資料館展示室の原形ともなる資料展示室が図書館内に開室しました。

## □隔離政策全盛期の資料も

現在、国立ハンセン病資料館には図書室があり、ハンセン病図書館の活動や機能を受け継ぐ位置づけとなっています。また現資料館に収蔵されているへも

の資料は、ハンセン病図書館に集められたコレクションも引き継いでいます。多磨全生園が全生病院として開設されたのは1909(明治42)年のことでした。資料館に収蔵されている生活資料をみていくと、残念なことに療養所設立当初の20世紀第1四半期の資料はほとんど伝わっていないのですが、ハンセン病図書館での資料収集が遅くとも80年代に始まったことにより、20世紀第2四半期、すなわち隔離政策が最も強力に推進された昭和前期の生活資料が、失われる前に確保されたことが窺えます。これもハンセン病図書館での文化活動の賜物であると考えています。

#### □当事者から非当事者へ

社会に役立つ資料館活動を行うという趣旨から、より啓発普及に重きをおいた活動をするべきだという意見もあるのですが、国立ハンセン病資料館が博物館である限りにおいて、資料の収集・保存・研究・公開が重要であることも疑う余地はありません。

また、2つの設置目的とは、まさに歴史遺産(もの資料・ばしょ資料)を引き継ぎいでいってほしいという願い、歴史遺産を利した啓発普及活動を充実してほしいという願いであったわけ

す。国立ハンセン病資料館は、運営に携わる人間が当事者から非当事者へ移っていったとしても、2つの思いを墨守した活動を行っていくべきであると考えます。

#### □国が名誉回復を實踐する意味

その意味において、国立館としてリニューアルした際に、国が被害者の名誉回復を實踐する場としたことも重要です。資料館活動の維持・発展は国の責任において行われることが明らかになったからです。名誉回復事業に国が予算を計上し続けるこ



とは、国の本気度と良心を表しているでしょうし、それによって被害者の名誉回復が進むということは、裁判敗訴によって貼られた加害者のレッテルも同時に剥がれていくということになるでしょう。それはまさに国の名誉回復でもあるからです。

#### ■報告を受けて

#### 切実な思いを感じとる

杉山弘(ネットワーク・市民アーカイブ/町田市立自由民権資料館)

公立の資料館に勤務しているので、他館の展示スタンス、構成やバランスなどに、私の眼は向く。かつての高松宮記念ハンセン病資料館の展示には「慈悲による施療」というニュアンスを覚え、これが「高松宮」記念とある資料館ならではのスタンスか、と思った。また国立の資料館へのリニューアル後は、エントランスから常設展示室にいたる廊下沿いの展示(らしい予防法の廃止から国賠訴訟における国の敗訴の経緯が詳しく説明されている)が、プロローグとしては、バランスを欠くのではないかと感じていた。こうした印象や感想の背景が、黒尾和久さんのお話でよく解った。

20年ほど前から、私もハン

セン病資料館を利用してきたが、運営主体の変遷の過程は、ほとんど知らずにいた。そのことは、山下道輔さんを始めとする入所者の、資料館の原点とも言うべき思い、たとえば「患者の書いたものが広く役立つ時代がきつとくる。そのため資料を保存する施設を作ろう」(松本馨さん)という思いや、あるいは「ハンセン病がなくなっても：障害者や他の疾病の患者に対して、同じ過ちがくり返されないようにするための啓発基地に」この資料館がなつて欲しい(佐川修さん)という思いについて知り、理解する術を、私がかもてずにいたことを意味する。

かつて足繁く、ハンセン病資料館に通つた頃には、ご健在だった国本衛さんやお連れ合いの美代子さんをお訪ねもした。昨日、ハンセン病図書館があった2つの場所を訪ねてみた。跡に佇むと、文庫や図書館、資料展示のコーナーを創つた「切実な思い」が、今もそこには籠っているように感じた。その思いがどのようなものであり、それをどのようにして受け継いでいくのかが今日の主題だ。

翻つて、私たち市民アーカイブの切実な思いとは何だろう

かと考えた。市民活動の担い手たちが、それこそ切実な思いで生み出したミニコミ・通信、チラシやポスターを集め、公開する、私たちのこうした活動には、どのような切実な思いがあるのか、これを機に、あらためて自問したいと感じている。(追記・佐川修さんは2018年1月24日に逝去されました。)

#### □質疑応答

**参加者** 国立に移行して、予算などに変化はあったか。

**黒尾** 「高松宮記念資料館」より以前は入所者のボランティアや寄付でまかっていた。国立になり約3億円の予算がついた。運営管理者は毎年行われる公募で決まり、ふれあい福祉協会から日本科学技術振興財団、そして現在は日本財団へと変遷している。学芸員も7人おり、これから全国の資料館とのネットワーク構築が課題となる。

**参加者** 国立に移行した際の苦悩を書いた学芸員の論稿があるが、現在はどうか。

**黒尾** 学芸員の抵抗や厚労省とのギスギスした関係は、国立にリニューアルした前後が最も大きかったようだ。現在ではかつての危機的状

況はないが、今後国の影響を受けたいようにする努力も必要と思う。

**参加者** カルテなど医療記録はどうなっているのか。

**黒尾** 一部火事で焼けてしまったものもあるようだが、基本的には各園に残っている。データ化を進めているものもあるが、どのように公開できるかまで話は進んでいない。とりあえず廃棄されることはないだろう。

**参加者** 全国の療養所に派遣している学芸員の状況は？

**黒尾** 来年度までに13園全部に派遣できる。長島愛生園

や菊地恵風園は2人体制にする予定。

**参加者** 沖繩愛楽園は、面白い取り組みをしていた。

**黒尾** 沖繩愛楽園の学芸員は1人だが、自治会がしっかりとしている。震災により古い（もの）資料は多くないが、展示は充実している。

**参加者** 山下さんは何でも集める方だった。聞き書きもされていたが、研究者の立場からその資料収集はどのように評価されるのか。

**黒尾** 山下さんは「ハンセン病図書館」を残したいとこぼしていたが、図書館を管理して

## 第3期 緑の報告

市民アーカイブ多摩で開催した緑の報告の第4回と特別編の報告を掲載します。

第4回 10月28日(土)

### 産婆と産院の歴史と現代の産

大出春江さん(大妻女子大学)

資料保存と出産と助産の研究のために、2017年4月から「産婆・助産婦関連資料のデジタルアーカイブ化のための資料収集」に取り組んでいる。全国の都道府県助産師会を通じて歴史的資料の情報提供を呼びかけている。大阪府助産師会館から

#### 産婆から助産師へ

1932年から41年までの『大阪市産婆会会報』、1927年から42年まで開催された『赤ちゃん審査会記念写真帖』等の貴重

な資料を借り受け、デジタル化を進めている(当日一部回覧)。経験的に技術や知識を身につけた「トリアゲババ」が19世紀末から20世紀中頃にかけて都道府県(または内務省)によって免許が与えられる「新産婆」に変わっていく。1942年に、国民医療法が成立し、「産婆」から「助産婦」という名称が変わった。48年には、GHQ占領下において

いく問題などがあつた。本当に何でも集める方で、それらのモノには引力があり、それこそが文化だとも言っていた。そして慕ってくる方がいろんな形で支えたからこそ、資料館ができた。

**参加者** 日本が戦前に作った台湾のハンセン病療養施設、楽生園で保存運動があるようだが、連携はあるのか。

**黒尾** 楽生園では植民地期の建物が残っていて大変貴重だが、放置されたままの状態、現在は地下鉄によって園が分断されてしまっている。シンポジウムに参加し

たりはしているが、まだ具体的な連携はない。

**参加者** 入所者が高齢化して亡くなってしまうが、彼らの思いをどのように伝えていくとしていくのか。

**黒尾** 生きた証としては当事者の声が一番良い。ただ、受け取る我々は裏を取って作業を進めていかなければならず、決して想像した自分語りをしてはいけない。当事者は何を語ろうとしたのか、語れなかったのか。たくさんある資料から、何をどういって、つないでいくべきなのかを検討している。多くは

語られないが、積極的にアプローチすると意外と出てくる。

**参加者** 園全体の変遷をどう保存していくのか。

**黒尾** 土地利用の変遷は、写真や見取図、航空写真などが活用できる。写真技師がいたため、戦前の療養所の写真は多いが、昭和20〜30年代は少ない。全体の将来構想は厚労省が自治会に投げているが、なかなか決まらない。残せるもの、残せないもの、選択が必要であり、今後個別に話し合われていくことになるだろう。



娩が普及しつつある。

医療法と保健婦助産婦看護婦法が制定され、病院・診療所・助産所の定義が定められた。51年当時は7万人を超える助産婦があり、出張分娩と助産所分娩を行っていた。しかし、その後急速に出産環境は変化し、病院で産み医師が立ち合うことが当然となっていく。陣痛促進剤の使用や帝王切開率が上昇し、さらに近年は硬膜外麻酔による無痛分

保助看護法は、2001年に保健師助産師看護師法に名称変更された(看護や保健分野は男性がそれ以前から参入していたが、助産は女性に限定されている)。07年には医療法第19条が改正され、助産所の嘱託医師が産婦人科の医師のみとなり、嘱託医療機関の確保が義務となり、前後して多くの開業助産師が産産を扱えなくなった。有床助産所は現在、300足らずであり、年々減少している。出産を介助できる助産師が育つ環境も乏しくなっている。

#### 出産をめぐる運動

制度以外の出産をめぐる動きの変化もある。70年代のアメリカのフェミニストによる女性自身による当事者としての声と身体の見「女の健康運動」リプロダクティブヘルス&ライツ」が日本にも広がった。前後して陣痛促進剤利用の批判や、帝王切開増加の問題があり国際婦人年に合わせ大阪の民間団体が3千人を超えるアンケート調査を元に出産白書を出版した。社会学や文化人類学で出産研究が行われるようになったのは80年代である。90年代には助産者と女性たちの連携した運動が展開され、11月3日を「いいお産の

日」とするイベントを始めてい  
る。21世紀に入り、出産施設の  
減少と集中化、また産婦人科医  
師数の減少により、医療化批判  
から出産場所の確保が重要課題  
になってきた。近年、ピーク時  
の半数に減少した助産師の数

はここ数年、増加に転じている  
が、依然、病院では見えにくい存  
在である。

#### ■義母の助産院日誌から

義母の大大出ツルは自立のため  
に助産婦になった人である。女  
学校卒業後、神田にある産婆養

成学校を経て、試験に合格後、39  
年から中野組合病院に勤務。仲  
良しの従妹と共に川崎市の柿生  
で戦時中に助産院を開業。助産  
院日誌からは、産むか産まない  
かの相談や生活相談など、地域  
で助産院が果たした役割や意義

がわかる。こうした記録や資料  
はまとまって保管されないまま  
消失する可能性が高い。歴史資  
料の発掘と保存を産婆・助産師  
の果たした役割や意義の評価に  
つなげたいと考えている。  
(記録・中村、江頭)

特別編 10月23日(月)

## 住民はどう未来を選択し、 作り上げていくのか

―横浜新貨物線反対運動を通して―

宮崎省吾さん(元横浜新貨物線反対同盟事務局長)

### ◆「地域工」の思想と政治

宮崎さんは、戦後日本の住民  
運動史にひとつの運動の形を  
提起した「横浜新貨物線反対運  
動」の事務局長を務めた。なか  
でも「いま、「公共性」を撃つ―  
「ドキュメント」横浜新貨物線  
反対運動」(新泉社、1975年)  
復刻版(草土社、2005年)で  
まとめられた住民運動におけ  
る「地域工」の思想は、市民が  
政治に関わる原点のあり方を  
示唆する点で、今日に至るまで  
大きな影響を及ぼしてきた。

今回は1966年、自宅そ  
ばに国鉄貨物専用鉄道の開発  
計画があることを知った時か  
ら、運動の過程・争点となった  
ことなどを中心に話していた  
だき、参加者との間でさまざま  
な意見交換を行った。以下、印

象的な話を中心  
に紹介したい。

### ◆自立・自発的 組織として

建設計画が持  
ち上がった時、

どのような形で住民の意志を  
伝えていくべきか。宮崎さん  
によると、市議や地元選出の代  
議士など既存の路線、あるいは  
影響を受ける自治会単位で運  
動すべきといった意見があっ  
たという。ただ、鉄道路線が自  
治会のはざまにあったことな  
どから、既存の自治組織とは  
異なる団体(反対同盟)を自立  
かつ自発的な組織として結成  
し、そこから運動がスタート



### ◆運動を支えたエピソード

運動の財政を支えたひとつ  
に共同購入事業がある。当初  
はコメが中心で、バザーを開く  
時などは、いろいろな伝手で安  
く仕入れて販売していた。や  
がて、三里塚のワンパック野菜  
も取り扱うようになった。横  
浜新貨物線の運動支援者は最  
大の顧客でもあった。当時は  
インフレの時代ということも  
あって人気が出て、定着しすぎ  
たと、宮崎さんは語る。和解後  
も5年くらいは続いていたと  
いう。

宮崎さんは、大学卒業後、商  
社勤務を経て、横浜に移住。そ  
こで小さな貿易商社に職を得  
た。自営業に近かったので、時

間の調整ができた。また関内  
にオフィスがあったので、横浜  
に関する情報も入ってきた。  
ある時は、会社のデスクで運動  
の広報を書いたこともあった  
という。

### ◆出来事は起きてしまっ 振り返ってみて、宮崎さんは こう語る。

「個々の運動は、過去の運動  
を学ぶわけではない。出来事  
は起きてしまう。全部自分で  
考えるしかない。革新が頼り  
になるというわけではない。  
砂川闘争から学んだというこ  
とではない。しかし、いざ起き  
てから運動を学ぶと違った面  
が見えてくる。左翼の運動だ  
と思ってみていると実はちが  
う。砂川、内灘、谷中村など、始  
めてみると、あちこちに同じこ  
とをやっている人がいた」

宮崎さんが思想的な手がかり  
としたフランク・ファンに  
しても、ファンに学ぶのではな  
く、たまたま「出会った」とい  
うのが当たっていると語られた。  
なお、運動資料は93年に住民

## 「緑蔭トーク」 第4期スタート

多士済々の顔ぶれで、今年も  
緑蔭トークを開催します。いず  
れも会場は、市民アーカイブ多  
摩(玉川上水駅歩8分)、時間は  
午後4時15分〜6時です。

### ◆第1回 4月28日(土)

「日大闘争の資料を国立歴史  
民俗博物館へ寄贈して」  
矢崎薫さん(日大全闘)

### ◆第2回 6月23日(土)

「国立の町づくりを考える  
会」から公民館を守る会まで」  
山家利子(運営委員)

### ◆第3回 9月22日(土)

「戸籍と日本社会―『国民』  
を縛りつづける制度」  
遠藤正敬さん(早稲田大学講師)

### ◆第4回 10月13日(土)

「デジタルアーカイブの構築  
と地域自治」  
津村智里(運営委員)

図書館に委譲され、埼玉大学共  
生社会研究センターを経て、現  
在は立教大学共生社会研究セ  
ンターに所蔵されている。ま  
たそれらは「戦後日本住民運動  
資料集3 横浜新貨物線反  
対運動資料」(全9巻十解題)  
(すいれん舎・08年)としても、  
広く共有されている。

(文責・町村)

# ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信ミニコミを、発行者の方に紹介していただきます。

## ゆきわたり

代表の篠原睦治が知能テストで「特殊学級」へと判定された子どもに出会い、その子の「おれ、普通に行きたい」という言葉に突き動かされたのをきっかけに、1972年に「教育を考える会」を開きました。どの子どももたまりまに地域の学校に行くことを応援する機関紙『ゆきわたり』で呼びかけをし、その会の報告をすることから始まり、以来2018年1月（年間10回発行）で505号になります。

70〜80年代、学校や行政から障害を理由に「普通学級」から「特殊学級」「養護学校」を勧めら



- ・創刊1972年、450部、B4判、20頁前後、モノクロ、年10回発行
- ・年会費：3600円
- ・tel:03-3824-3306（子問研事務所）
- ・fax:03-3824-3307
- ・当館所蔵：362-505号
- ▽505号＝年賀状・新年メッセージ
- 2017夏合宿特集、春の討論集会、「こもん軒」で出会って思うこと、日本国憲法の改悪に反対する、連載エッセイ他

れた親子と共に、どう対抗する言葉を作っていくか、『ゆきわたり』紙上で各地・各立場の読者が意見を出し合い、励まし合い、議論してきました。長短問わず、硬軟とりまぜて、色々な文章、写真、絵を掲載しています。当初の子どもたちは40〜50代になり、いまでは学校問題にとどまらず、街中で制度やサービスを使いこなす暮らし方に話がシフトしています。一方で制度化が進められていくにつれて、障害が程度、種類別に細かく分けられ、差別が見えにくくなってきている現状も報告されています。

毎月第3土曜日の発送作業は、駒込駅近くの「こもん軒」(当会事務所、87〜08年までは定食屋として開店)で十数人の老若男女が集って作業・昼食を共にします。その後「暮らしを語る会」があり、近況を語り合います。

子供問題研究会の年間行事のお知らせとその報告も大きなウエイトを占めています。春の

# ごみつと・SUN

1990年代半ば、多摩地域のごみの最終処分場を巡って問題が噴出し、出口が見えない中、ごみ問題の真の解決を目指して96年12月、三多摩発アクシオンフォーラム「21世紀のごみを変える！」を小金井公会堂で開催しました。このフォーラムをきっかけとして、ごみ問題をもとの生産から消費、廃棄までを視野において考え、活動し

討論集会は、毎年「やっぱり、

ゴチャゴチャ一緒に居よう」をテーマに2日間にわたって、暮らしの中の学校、職場、福祉、医療などの問題と課題をじっくり話し合います。夏の合宿は43年間大井川の上流の青部セミナーハウスで、5泊6日、赤ちゃんから老人まで百十数人がまさしくゴチャゴチャ暮らし合います(この報告の号は若い人たちが素敵な編集をしてくれます)。年の初めの新年会に始まり、春のピクニック、秋にはソフトボール大会、冬はクリスマス会、そして丸太小屋づくり(長野県伊那市)等々、遊びの場を展開していきます。遊びほうけることに老若男女が様々な出入りしています。『ゆきわたり』はその中心にあります。

(戸恒香苗)



ようと、準備期間を経た98年5月に「ごみ・環境ビジョン21」を設立しました。

『ごみつと・SUN』は、設立当初から年6回、会員向けに発行している情報紙です。

創刊時は、焼却に伴うダイオキシンの発生や、身の回りの環境ホルモンなどが社会問題となっており、何度も特集を組みました。また、容器包装リサイクル法の改正では、集みや署名活動、メーカーとの交渉などを精力的に行い、紙面に反映させてきました。

また、地元の多摩地域には特にこだわり、ごみ減量に向かうために情報を共有しよう、30自治体のごみの排出量、資源化率、ごみ処理コストなどを毎年継続して取り上げ、ランキングを発表し、自治体に贈呈してきました。加えて、「がんばる自治体」シリーズでは、力を入れている施策について担当者から寄稿していただいています。今で

は、多摩地域の自治体は全国的にもごみ減量やリサイクル率で先進自治体になり、環境省が毎年発表しているベスト10には多摩地域の自治体が多く登場しています。

その他、「市民ごみ大学セミナー」(年2回開催)や、「生ごみリサイクル交流会in多摩」のダイジェスト、ドイツ在住のジャーナリスト田口理穂さんの人気の連載「ドイツのエコ」、「会員さんってどんな人?」など、読みたくなる紙面を心掛けています。また、現在の表紙のイラストは、井上ヤスミチさんが紙面の内容を反映させたオリジナルで描いていただきました。大変好評です。

昨年度、NPO法人を卒業して任意団体になり、会員を再募集しましたが、会員数がそれほど減らなかつたのは、通算で124号になる『ごみつと・SUN』の継続のお陰だと思っています。

(江川美穂子)

- ・創刊1998年、200部、A4版、16頁、モノクロ、年6回発行
- ・年会費：個人3000円、団体6000円
- ・E-mail: gomikan21@docomo.ne.jp
- ・当館所蔵：4-16,39-119,new1-5号
- ▽new4号内容＝市民ごみ大学セミナー報告、古布リサイクルの最前線、生ごみを分別収集・資源化している自治体、3市共同の中間処理施設建設、連載他

# 市民アーカイブ多摩の資料棚から 8

## 〈平和②〉

分類番号20「平和」のミニコミのうち、前回紹介した「社会運動団体が発行するミニコミ」と、もう1つが、今回紹介する「平和関係の資料館が発行するミニコミ」である。

戦争史跡を保存する会や戦争に関わる資料を保存する団体が発行するミニコミは、分類番号79（文化財）ではなく分類番号20に分類されている。

### 【十五年戦争の資料を残す】

一番多いのが十五年戦争に関わる資料を保存している団体のミニコミである。ここでは4つを紹介する。有名な資料館ではアメリカのオバマ前大統領が訪問した、広島平和記念資料館を運営する広島文化センター発行の『平和文化』がある。153号（2004年6月）以降を所蔵。

『東京大空襲・戦災資料センター』は02年に東京都江東区に開館した東京大空襲の惨禍を伝える東京大空襲・戦災資料センター（公益財団法人政治経済研究所の付属施設）が発行するミニコミ。6号（05年2月）以降の号を所蔵。『平和資料館草の家だより』は1989年に創立し、高知県における戦争や言論弾圧の記録を残す活動をしている平和資料館草の家のミニコミである。平和運動や原発問題に関する活動も行っており、90号（06年4月）以降を所蔵。他にも資料館の建設を目指している団体のミニコミとして、『東京に平和祈念館（仮称）を』（東京都平和祈念館（仮称）「建設をすすめる会」）がある。東京でも東京大空襲の被害についての弔意措置と記録保存・公開の要求があり、「東京都平和祈念館（仮称）建設委員会」が設置されたが、その後の動きの中で棚上げになってしまった。そこで、この動きを継続させ、戦争の惨禍を語り継ぎ、平和と命の尊さを伝える場所として「東京都平和祈念館（仮称）」の建設を求める活動を行っている。署名活動や議員への陳情活動の様子、平和資料館訪問報告などが掲載されている。15号（09年）以降を所蔵。

『東京に平和祈念館（仮称）を』（東京都平和祈念館（仮称）「建設をすすめる会」）がある。東京でも東京大空襲の被害についての弔意措置と記録保存・公開の要求があり、「東京都平和祈念館（仮称）建設委員会」が設置されたが、その後の動きの中で棚上げになってしまった。そこで、この動きを継続させ、戦争の惨禍を語り継ぎ、平和と命の尊さを伝える場所として「東京都平和祈念館（仮称）」の建設を求める活動を行っている。署名活動や議員への陳情活動の様子、平和資料館訪問報告などが掲載されている。15号（09年）以降を所蔵。

『東京に平和祈念館（仮称）を』（東京都平和祈念館（仮称）「建設をすすめる会」）がある。東京でも東京大空襲の被害についての弔意措置と記録保存・公開の要求があり、「東京都平和祈念館（仮称）建設委員会」が設置されたが、その後の動きの中で棚上げになってしまった。そこで、この動きを継続させ、戦争の惨禍を語り継ぎ、平和と命の尊さを伝える場所として「東京都平和祈念館（仮称）」の建設を求める活動を行っている。署名活動や議員への陳情活動の様子、平和資料館訪問報告などが掲載されている。15号（09年）以降を所蔵。

会ニュース 保存運動（松代大本営の保存をすすめる会）である。戦争末期に大本営の移転先として検討されながら、敗戦で放棄された松代の本営を保存し、同時に平和教育に役立てる活動をしている。08〜09



年、13年発行号を所蔵。もう1つは『Peace あさかわー浅川地下壕の保存をすすめる会ニュース』（浅川地下壕の保存を進める会）である。97年に結成され、東京都八王子市にある浅川地下壕の保存活動から出発して、地下壕の見学会や八王子の戦争に関する調査、各地の戦跡保存団体

相互の交流を行っている。1号（97年12月）から112号（16年9月）の大部分を所蔵。

### 【世界の戦争の記録】

また、保存対象となる戦争の資料は国内だけに限られない。国外の資料として第二次世界大戦におけるホロコーストの記録や記憶を保存、伝承する活動を行っている団体のミニコミも所蔵している。ここでは次の2つのミニコミを紹介したい。

『ころを育むために』は、「NPO法人ホロコースト教育資料センター（Kokoro）」が発行しているミニコミである。ホロコースト関係の記憶を伝える活動として、訪問授業や展示パネルの貸し出しなどを主な活動としている。12号（02年7月）から41号（15年11月）までを所蔵。『Imagine』はアウシュビッツ強制収容所跡を保存するポーランド国立博物館から借り受けた犠牲者の遺品・関連資料・記録写真等を展示する「アウシュビッツ平和博物館」（福島県）が発行しているミニコミである。館の活動がメインだが、震災後は福島原発関係の記事も掲載されている。23号（09年7月）以降を所蔵。

最後に、戦争資料や戦跡の保存を通じて戦争責任の追及を

### 【戦争責任に向き合う】

最後に、戦争資料や戦跡の保存を通じて戦争責任の追及を

行っている団体のミニコミとして『ABC企画ニュース』（ABC企画委員会）がある。1992年に発足し、中国東北地方における731部隊の活動や遺棄毒ガス処理の問題など、十五年戦争におけるABC兵器使用の戦争責任の追及活動を行っている。近年では福島原発の学習会も行っている。27号（03年8月）以降に加え、講演会、学習会のピラも多数所蔵。他にも戦争責任の問題を扱っている団体のミニコミとして『lets』（日本の戦争責任資料センター）を一部所蔵している。

また、国内の運動やアジアの民主化運動などが紹介された『AMPPO』（アジア太平洋資料センター発行）などもある。18号（73年）〜59・60合併号（84年）を所蔵。

戦後70年以上が経過し、戦争を知る人々が次々と鬼籍に入られる中、戦争の記憶と記録を伝える活動は、今後益々重要になってくるだろう。

異例ではあるが、2号にわたって紹介することで、平和運動の多様性と歴史の長さの一端を感じていただけたと思う。ご興味のある団体やミニコミがあればぜひ来館いただきたい。

（長島祐基 一橋大学大学院、会員、資料整理ボランティア）

# アーカイブ多摩 目次

をお互いに行っているようで、嬉しく・元氣になりました。

## ◇2018年度運営委員募集

「市民アーカイブ多摩」開館から丸4年、当会の前身である「市民活動資料情報センターをつくる会」発足は06年ですので12年になり、干支がひとめぐりしました。新しい風を入れてくださる新運営委員を募集中です。一緒に運営を支えてください。

## ◇利用者の出会いの場

ある開館日。親が元少年航空兵で、関連する資料を何とか保存し、資料館をつくりたいと思っ

ていらっしやる方が来館。別の見学者もあり、それぞれが対応していると、立川空襲の話など共通の話題で盛り上がり、出会いの場となりました。みなさんそれぞれ持っている「次の世代に残したいもの・伝えたいこと」を話すことによって、活動へのエール交換

## ◇法人化プロジェクト発足

「市民アーカイブ多摩」開館時に取り組んでいた法人化は開館業務が忙しく、しばらく棚上げにしていたが、会員の方から、「持続可能な資料室運営を」という言葉で、再度取り組むことを決意。運営委員会内で小さなプロジェクトが立ち上がり、小さな「国立」で運営されていることに元氣をもらい、少しずつ進化させていきたいと思えます。ご意見お待ちしています。

## ◇樹林開放日は3月25日

「市民アーカイブ多摩」はNPO法人グリーンサンクチュアリ悠が保全する保護樹林地内にあります。その緑地の樹林開放日が3月25日(日)10~12時に開催されます。木蓮が美しいですよ。

## 運営委員会など

- 10月20日 第7回運営委員会。参加者8人。会員・カンパ者、当番確認、利用者報告(毎回)。GS悠閑連緑蔭トーク役割分担、資料分類40の変更、法人化に向けて。
  - 10月23日 第3期緑蔭トーク【特別編開催。参加者18人。
  - 10月28日 第3期緑蔭トーク④開催。参加者11人。
  - 11月17日 第8回運営委員会。参加者8人。「アーカイブ通信」11号・「会員募集チラシ」反省、現場を訪ねる・1月8日催し企画他。
  - 11月23日 「現場を訪ねる」第2回開催。参加者16人。
  - 12月15日 第9回運営委員会。参加者7人。1月8日役割分担、2018年度総会と記念講演会、年賀状案、分類変更手順説明他。
  - 1月8日 「原点から考える」第3回開催。参加者35人。
  - 1月19日 第10回運営委員会。参加者7人。1月8日催し反省、18年度総会に向けて、総会講演会講師検討、「アーカイブ通信」12号他。
- ※運営委員会は毎月第3金曜日19~21時。正会員の皆様の参加を歓迎しています。

## 会員数(2018年1月)

- ・144人(正会員60、賛助会員84)
- ◆新規入会ありがとつ(敬称略)
- ・正会員 大出春江
- ・賛助会員 黒尾和久、土屋喜代美、萩原春代、星埜美智子

## カンパありがとう

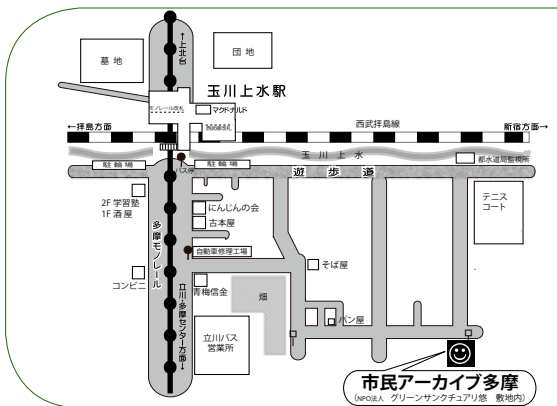
- 17年10月1日~18年1月31日
- 岩垂弘、空木茜、黒尾和久、佐橋弥生、鈴木清隆、中山義博、横田順子、匿名2人(敬称略)

## 来館者・参加者の声

- ・「市民アーカイブ」の存在をどうやって周知するかが難しいけど、大切だと思いました。
- ・法政大学の大原社研に委託した資料の整理などは、今後どうなるのか心配です。
- ・実際に住民運動(市民運動)を経験された方の話にはリアリティがある。個別具体的な体験に、市民が取り組むべき普遍性が見えてくると思えました。スペシャリティを貫くジェネラリティは経験則に立脚するようだ。
- ・最近の論壇や時評、「平和」「戦争」というコトバが1人歩きしていることが気になります。日本が十五年戦争になだれこんでいく前段には、自由な議論、思想への抑圧、弾圧があったこと。抑圧を体験した人々が亡くなられていっていることが関係しているのではないかと思います。

## 編集後記

歴博の企画展「1968」、国立ハンセン病資料館：市民が動き、記録を残す努力をしてきたことを、歴史となり、「国立」となることに感慨を覚える。市民アーカイブ多摩も50年後には国立アーカイブになつたりして?!(鈴・湯・増・江)



## 市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時~4時 ・入館カンパ：100円~
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7 (多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel & fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1400タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。 www.c-archive.jp